



療治茶談

九

武
208
9



門中武
508
卷9



療治茶談續編附錄序

盛哉五九積山氏談也彬七乎千載醫生之

龜鑑也我本邦自大治年間以來

勅被置典藥寮又有藥園當竹屋町西今為田地

昔此所有藥園井和氣氏稱曰半井尋

丹波氏二家連綿而無闕也蓋其所為

宗和氣氏者出垂仁之皇統奉

勅嵯峨上皇撰大同類聚方祖神傳之

續編附錄序

靈方矣丹波氏者其先出于後漢靈帝
從內素漢家之方法也我東方醫典舶
來尔後如微旨奧趣追年不爲少注解
或不能融貫通曉也就中名古屋玄醫
北山友松子玄治見宣之諸大家皆取
而抄注之美則美矣而後世猶不得無
憾自是以降至後藤氏吉益氏其支流
古方者流出以設怪誕竒僻之說高妙

其言而駭世聽聞焉動稱禁方隱見微
一其解愈繁愈惑而耳食之徒相從唱
和雖有出入齟齬者深信不疑僻流一
成滔ト不反正自是之後雖有篤實英
才皆墜其圈套莫復能焉時哉會文明
之運諸子百家之士僞傑競起此道獨
無其人乎哉乃總州有積山先生遊學
於其門者數子如備中州三宅氏可謂

登其堂也能通古方殊長素難後世之
奧儀所說無不徵據內經金匱傷寒之
規矩大倡古義破數百年醫說偏僻之
惑矣嘗著療治茶談續篇剖蠶絲拆牛
毛精確詳明莫以尚焉其有功疾醫也
廣且大矣尋集餘論有處成附錄是也
予雖非其門受而讀之則深切懇至而
書中微旨興趣揭焉乎著明矣固非近

世俗學諸注家之處能迨也夫亦千載
醫學者流之格法者也而人皆慣淺近
浮靡之說也一披之見其沉雄整密豈
異乎尋常以爲迂遠亡補於事莫敢復
取焉者矣嗟乎卞和氏璧可不抱乎因
私淑而俟同志云予其雖不爲此書之
忠臣然又免乎爲疾醫家之臯人則庶
幾乎者

寬政庚申仲秋

攝陽 中川昌房



甘谷學詣去來...

療治茶談續編附錄

目次

- 金正五十方加味
- 奪命丹
- 痔漏一方
- 勞瘵奇方
- 人油丹
- 加減五香湯
- 小兒一切惡瘡秘方
- 胃腕煎方

南堂 積山先生 經驗

備中 三宅道甫 筆記

- 麻疾奇方
- 膿麻大奇方
- 湯火傷妙方
- 毒鼠咬方
- 四君子湯治驗
- 真寒假熱治驗

療治茶談續編附錄

南總 積山先生 經驗

備中 三宅道甫 筆記
攝陽 奥田憲民 治驗

金正五十方加味

東都原温菴常ニ不換金加味レテ諸病ヲ治スルコト妙
 ヲエタリ其方五十方アリ津田玄僊先生コレヲ經驗セ
 リコノ方中ニハナハタヨキ方モアリヨク記シテ治療
 ノ乏レキヲ助クベシトイヘリ
 不換金正氣散 四時感冒傷寒瘟疫時行及山嵐瘴氣

寒熱往來霍亂吐瀉下利赤白及出遠方不伏水土並皆治之

厚朴 陳皮 藿香 半夏 蒼朮 各等 甘草 半錢 生姜大棗水煎温服ス

一 汗アリテ惡風スルハ桂枝芍藥ヲ加フ

二 汗ナクテ惡寒セハ麻黄ヲ加フ

三 目ノ中アカ筋アリテ酒ニ酔タルゴトクドロクトスル者ハコレ痰トコ、ロエテ瓜蒌仁黄芩桔梗ヲクワフ

四 アカキ處ヲイヤカリテ目ノウエクホミ腰痛ミカラナクホソノ下クサクトスルハ腎虚ナリ瓜蒌根知母ヲ加ヘテ半夏ヲサルヘシ

五 ヲコリニハ常山栝榔草菓ヲ加フ

六 雨ニヌレタル夕或ハ夜ツユヲウケアルイハシメリタル衣服ヲキテイタカトタス子テツレナラハ

七 瀉紫蘇乾姜ヲ加フ

八 ヒタイノヘン手ノヒラニシミぐト汗ノ出ル人ニハ大黃ヲ加フ

九 臍ヨリシタカカテハ左リカ右キカカタクコロクスル人大便セスバ大黃ヨシ不食ノ人トテモマタ脉沉實ナルカ尻ヘハツテクルヨウナハ下藥クルシカラスナヲ口傳アリ

十 潮熱ニハ大黃枳實柴胡ヲ加フ

十一 吐逆トラスハ半夏ヲマシテ丁子確砂ヲ加フ

十二 水ヤ食モツヲ吐テソノハキタルモノ皆苦ケレハ
半夏ヲコレテ黄連黄芩ヲ加フ

十三 吐逆ドウレテモ止マラスハ大黄ヲ加テヨレ枳
實モヨレ

十四 冷瀉ニハ附子乾姜ヲ加フ

十五 熱瀉ニハ黄連大黄ヲ加フ

十六 小便ガ大用道カラ水ノコトク出ルコレヲ水穀不
分ストイフ水穀ヲ分利スヘシ猪苓澤瀉ヲ加フ

十七 食積瀉ハ腹痛甚タシクシテ瀉シ瀉スハ痛ミヤ
ムモノ是ナリ寒曲呉曲ヲ加フ

十八 疝瀉ニハ呉茱萸茴香肉桂沢瀉茯苓ヲ加フ

十九 腹痛瀉ニハ寒曲ヲ加フ

十九 脾腎瀉トイフハ夜ノ明ガ夕ニ時ヲキハメテクク
ルナリ破胡子肉豆蔻ヲ加フ

二十 水ノアタリニハ滑石ヲ加フ

二十一 赤痢ニ黄連黄芩芍薬ヲ加フ白痢ニ乾姜木香ヲ加フ

二十二 痢病ヲトメタシトヲモフトキハ阿片ヲ加フ

二十三 寒痢ニハ附子肉桂茯苓乾姜ヲ加フ

二十四 積右ヨリサシコムニハ杏仁桑白皮枳實ヲ加フ左
ニハ白芍薬ヲ加フ

二十五 臍ノ上ニ在ハ肉桂黄芩乾姜ヲ加フ

二十六 臍下ノ積氣ニハ呉茱萸肉桂ヲ加フ

二十七 腎積ニ臍ノ下ヨリ起リテ心下ニノホリサシコム
ニハ龍骨肉桂ヲ加フ

三十八 痰積ニハ海石枳實貝母ヲ加フ

三十九 疝積ニハ枳實吳茱萸茴香川棟ヲ加フ

四十 脚氣ニハ木瓜楝柳薏苡仁ヲ加フヘシ

三十一 脚氣腫滿ニハ楝柳子木香桑白皮大腹皮ヲ加フ

三十二 腰痛ニハ土瓜根ヲ加フ

三十三 淋病ニハ大黄ヲ加フ

三十四 小便閉一ハ大黄寒曲ヲ加フ

三十五 小便閉甚レキニハ水銀ヲ加フ口傳アリ

三十六 消渴ニハ石膏麥門冬ヲ加フ

三十七 腎虛火動ニハ瓜蒌根黃栢知母禹餘糧石ヲ加フ

三十八 吐血ニハ生地黄生藕汁ヲ加フ更ニ藕汁ヲ嚙ス

三十九 鼻衄ニハ麥門冬生地黄ヲ加フ

四十 便血ニハ黃連黃芩黃栢山梔子ヲ加フ

四十一 便血甚々レキニハ阿片阿膠ヲ加フ

四十二 脹滿ニハ枳實大黃木通ヲ加ヘ甘草ヲ去ル

四十三 瘀血脹ニハ五靈子ヲ加ヘ甘草ヲ去ル

四十四 氣脹ニハ香附子烏藥ヲ加ヘ甘草ヲ去ル

四十五 水脹ニハ木香苦苧蘆ヲ加ヘ甘草ヲ去ル

四十六 水腫ノ甚レキ者ハ甘遂ト大黃トヲ加ヘ甘草ヲ去ル

四十七 婦人ノ滯下ニハ麒麟血阿膠ヲ加フ

以上不換金加味原温菴家秘ナリ

奪命丹 治小兒暴卒喘急短氣

牽牛子 大黃 各等分

右二味爲末煉蜜白湯送下

南紀植木顯行曰小兒ノ病ニ馬脾風ト云フ急病アリ何
ノ故モナキニ暴卒ニ喘急短氣一二日ノ間ニ死ス甚シ
キハ朝夕ヲマタス此奪命丹ヲ用ヒテ即効アリ何カナ
シニ火毒肺氣ニセテルト見テ下セル方ナリ王機微義
衛生寶鑑儒門事親醫學綱目等ノ書牽牛大黃ノ二味ヘ
栝椰子ヲ加ヘ奪命散ト名ツク元來中藏經ニ暴喘欲死
方大黃牽牛二味烏末蜜水調立トコロニ止トアリコレ
原方ナリ龔雲林医鑑回春ニ馬脾風ヲ活スルニ此奪命
散ニ人參ヲ加味シテ一捻金ト名クルナリ中藏經ヲ始
メイツレモ急卒ノ病ユヘ馬脾ト名クル計ニテ何ニコ
リ馬脾風ノ急症ヲナスコトヲイハス然レトモ奪命丹
ヲ用テ即功アル事予是ヲ試ミテ功ヲトルコトタヒク

ナリ是レ別ノコトニアラス痧氣火毒直チニ肺氣ニセ
マル急病ニテユハユル緊痧彥痧ト云ヘシト云ヘリ
痔漏一方

- 蓮藍 三方 土茯苓 八分 滑石 五分 川芎 車前子
- 大黃 甘草 各三分 猬皮 霜 二分

右八味以水ニ合煎取一合
南溟洞曰痔漏ハ解毒再造散ノ類ニテワツカニ能痛ヲ
去ルヘシ全ク愈ガタレ阿蘭陀ノ治方破針ヲ用テ患ル
所ヲ割リ燒酒ニテ膿汁ヲ浼イサリ以後金療ノ治法ニ
テ療治スヘシ余二人ヲ試ムニ全ク愈ヘシカドモ虛
弱ノ人ハツノ苦痛ニ堪ヘス妄ニ治療ヲ施レカタレ讚
陽合田末吾ワレニ一方ヲ授ク定テ明驗アラシカレ

トモ狸皮ヲ得スレテ未夕試ニス實ニ求吾ハ端人ナリ
カナラズ我ヲ欺カストイヘリ愚南溟氏ノコトバヲモ
チロテ狸皮一枚ヲ得テ二人ヲ治ス極テ功アリ
勞瘵奇方

茶毗 所煤 麝香 龍腦

右煤ヲ炒レ龍麝少シ入レ蜜ニテ煉リ本方ノ劑ニテ多
少ヲ計ラス服スヘシ予未夕試ミス定メテ功アフ此
方東都物産家中梁先生傳方ナリ

土鼈 人中黃

右ハ寒中大ナル土鼈ヲ取獲テ糞壺ノ中ニ放チ入コト
三十日取テ黑燒ニレテ糊丸ニレテ服スヘレ極メテ功

アリ或家ノ秘方ナリ

人油丹 治勞瘵五心煩熱骨蒸勞熱
人油 滋陰降火湯

右滋陰降火湯ヲ末トシ人油ニテ煉リ蜜ヲクフヘ病人
ニ人油ヲ知ラサヌヨウシテ緩服スベシ予夕友經驗
方ナリ

加減五香湯

沉香 丁香 乳香 木香 藿香 紅花 栴榔
蓮堯 甘草 各三分 忍冬花 木通 升麻 各五分

右十二味擺出シ用ユアトハ煎シ服ス
積山氏曰小兒一切胎毒ヲ治スル秘方也
小兒一切惡瘡秘方 小兒丹毒及一切惡瘡之神方

續編附錄

紅花 紫檀 各二分 大黃 七分 沉香 乳香

丁香 蓮堯 青黛 鬱金 枳榔 各二分

枳梗 九厘 甘草 小

右十二味細末ニシテ擺出後ノ滓ヲ紅花ノ煎湯ニテ
用コ

胃脘煎方 治男女虛人久痢

熟地黃大 山藥 炒大 吳茱萸 炒中 乾姜 炮中

甘草 炒小

右六味水煎服

此方去ル大家ノ經驗ニテ婦人産后ノ痢又ハ男子脾腎
虛痢又ハ寒疝虛利又ハ血利攻撃ノ後氣血衰損ストヘ
トモ附子ヲ用ヒカタキ場所ヘ此劑ヲ用テ大功ヲ得ル

予カ經驗アゲテカゾヘカタヘハナハ夕虛人ノ腹
ノウヲウスル妙藥ヲヤ予近年阿膠ナドヲクワヘテ諸
痢ノ治レカタキヲ瘥ス機變之術ナレハ等ニハツクシ
カタシ

麻疾奇方

髮灰 琥珀

積山氏曰髮灰ノ製法ハ男女ノ髮毛ヲ等分ニシテ黒燒
ニスルナリ是ヲ髮灰ト云フ琥珀ハ人ノ印籠緒シメニ
使フ至極上品ヲ極細末ニシテ用ユ其品アレケレハ効
ナレ此品二種トモニ麻病ノ痛ヲ治シテ妙功アリ各等
分細末トシテ空心ニ多ク飲ムベシイタミノツヨキ淋
病治セサルモノナレ亦二味ノ本方ノ煎藥ヘ少レツ

續編附錄

加へテモヨレ然レトモ痛甚レキハ別ニコレハカリヲ
用ユヘシト云ヘリ余モ亦功ヲレル

膿痂大奇方

鶏卵 蚯蚓

右鶏卵ノ一方ノ尖リニ小刀ニテ小穴ヲアケ其穴へ蚯
蚓生キナカラ入レ綿ヲモツテヨク蓋ヲイタレ卵汁ノ
コホレヌヤウニシテセツト、ノへ湯ヲワカシヨクニ
ヌキテソノ卵ノ殻ヲ去リ細末レ日陰ニ干シ卵一ツ分
早朝ニ空腹ニ服シ一切塩類茶酒油房事ヲ絶チ七日ニ
モチユ治セズト云コトナレ予數人ヲ治スコノ方ハ先
年浪華ニテ雲州ノ人ニサツカリケルコノ人コノ藥ヲ
モチイテ數人ヲ治スルヲ見テ彼ノ人ニホカノ名方ヲ

授ケ交易レテ授リ得タリレカレトモ患人ノ夕メニカ
キイタスナリモツトモ膿痂諸治功ナキニイタツテ驗
レアリ

湯火傷妙方

白粉 又唐土

杓ノ若葉

磨各大

江戸紫縮

燒存生

兔毛霜

ナキトキハ去

鶏卵

右五味鶏卵ニテ煉リ痛上ニ一面ニ厚ク塗り杓原紙ヲ
裂テ綿ノゴトクニイタレ履フヘシ後カナラス其アイ
タヨリ膿汁ヲ出スモノナリソノ上へ、又ヌリツクベ
レイユルニシタカウテ四邊ヨリヲノヅカラヲツベシ
カナラス手ヲ以テウカツコトナカレ亦灸瘡ニモヨロ
シ奇妙ニ功ヲ得ルナリ此方ハ長崎ノ産小西齊民ニ授

蘇台本草 讀編附録

リケル予又兎毛霜一味ヲ加ヘ功特ニハナハタシ數十
入ヲ試ニ附クルニ隨テ痛ヲサリ愈モ又スミヤカナリ
一男子山中ヘ入り雜木ヲ積テ紺屋灰ヲヤク山嵐ハケ
シク吹き來テ彼ノ男ノミノニモヘツキ一身コトコト
ク燒傷シ既ニ死セントス其イチ予ニ治ヲ乞フ行イテ
見ルニ一身腐爛火熱烟ヲナス則四味ノ火劑ヲ用ヒ此
方ヲ用テ案外ニ早ク治シタリ

毒鼠咬方

綿實 莽草

毒鼠ニ啣レタルニハ其疵ヘ莽草ヲ揉シテ附ケ夫ヨリ
綿ノ實ヲ爐火上ニフスヘソノ煙リヲ疵口ヘ入ルヘシ
晝夜十四五度其功神ノコトシ死スト云コトナシ近來

病犬ノ啣タルニ諸子ノ治驗ヲ傳來都會田舎モ鉄醬馬
錢等の藥ヲ用ヒ横死ヲスクイ天然ヲ終フコト其功
スクナカラス扱亦鼠ノ啣タル毒ニアタリ死スル人我
歴游中タビク聞ケリ然ニ因テ多聞ノ人ニ遇フトキハ
フノ方ヲ問ニ一諸生教テ曰此方定テ功アリ我友治驗
セリ我モ又治驗アリ子ニ傳フヘシトテ授ケル予喜
テ帳中ニ秘スルコト日久シクノ、チ南總ヨリ東都ヘ
カヘリ近江屋伊右衛門ト云心學者ノ家ヲ主トス主人
我カ医術ノ志フカキヲ憐レミ恩遇甚シアルトキ主ハ
ト黄金ケ原一見ニ到ル釜谷トイフトコロニ滯留シ近
江屋ノ好ニヨリ一村ノ男女ヲ集メ心學ノ教諭イタレ
三四日モ逗留シケリソノ里ノ貧人毒鼠ニ咬レ手ノ甲

ナカハ腐爛シ一身腫滿飲食下ラス殆ト死セニトスレ
ドモ食ニシテ江戸へ出テ大医家ノ療治ヲ乞ニ資方ナ
レト云テ予ニ治方ヲ問予則囊中ヲ探テ諸生ノ方ヲ授
ケル其夜ヨリ快ヨク逗留中ニ病狀過半治シタリ近
江屋モトヨリ陰徳者ナレハ千金ヲ得タルヨリモ悦へ
リ其歳ノ冬京都へカヘリケルニ去ル大家入毒鼠ニカ
マレ京中ノ医者手ヲツクシケレトモ終ニ逝ヌトキケ
リ港イカナ

四君子湯驗治

四君妙痔紀州毛利氏患痔多年肛門潰爛時出濃血臭無
比面色痿黃肢躄倦諸藥無効來求治予以四君子加黃芪
槐角与服而餘劑全愈

同國本間氏患痔直腸突出疼痛甚用四君子湯而全愈
右ハ北山先生ノ医按ナリ予是マテ虛人ノ痔疾ヲ治ル
ニ用テ大効ヲトリシコト其カスヲ知ルベカラススベ
テ虚レタル痔ニハ補中益氣湯ニテ十二八九効アレト
モ益氣湯ニテ治セヌ痔ヲ四君子湯ノ大劑ニテ治シタ
ル例レ亦ハナハタ多シ○四君子湯ヲ用ユルニ大事ノ
口訣一ツアリ唇ノ血色少キ時ハ四君子湯正面ノ證
ナリト知ルヘシ但シ是ハ痔ヤ下血ノ病人ヲミル時ノ
口訣ナリ補中益氣湯ハ手足倦怠ノ一ツヲ目的ニトリ
四君子湯ハ面色ノ痿黃ト唇ノ色ノ血色少キトノ一ツ
目的ニトリテ用ユ是益氣湯ト四君子ノフカレナリ益
氣湯トテ面色ノ痿黃ヲキニアラス四君子ニモ手足ノ

倦怠ナキニハアラ子トモ且口訣ハ十二ハナレス動
カ又證ヲノミ目約ニスル事ナリ是マタ口訣ヲ學一ツ
ノ心得ナリ

唇色淡白唇ハクチヒルナリ淡ハ唇ノ色血ノ氣少ク白
ミテ見ユルヲ云白ハ血ノ氣サツハリトナク真白ニナ
ルヲ云

吳山甫カ名医方考ニ曰上下失血太多則必勿与四物湯
ト云云四物湯ヲ用ユル肝要ノ心得ナリ此意ハ世入四
物湯ハ皆血ニ属スル證トサヘ云ヘハ血崩脱血等ノ證
ニモ皆カケヒキナレニ一向ニ四物湯ヲ用テヨヒト心
得ルハ是大ナルアヤマリナリ四物湯ノ當飯川芎芍藥
地黄ノ四品ハ皆陰藥ニテ陽藥ニ非ス人身ノ血ハ陰ナ

リ四物湯モ陰ナリ血モ陰ナリ陰ヲ以テ陰ヲ治ス故ニ
四物湯ヲ用テ諸ノ血證ヲ治スルハ此謂ナリ然レトモ
コレハ常ニシテ變ニアラス又四物湯ヲ春夏秋冬ノ中
ニテ云ヘハ四君子湯ハ春ト夏トノ如シ此四物湯ハ秋
ト冬トノ如シスベテ天地ノ間ニテ万物ヲ生スルハ春
ト夏トリ又万物ヲ枯ハ秋ト冬ヲリ是天地陰陽ノ常道
カクノコトクニシテ陰ハ物ヲ生スルモノニアラス然
ルニ血崩脱血等ノコトキ血ヲ多ク出ス病證ハ甚ク不
足スルヲ明カナリソノ血ノ不足スルヲ療治スルニハ
タトヘハ百文ノ錢五十文不足シタルヲハ又五十文足
子ハモトノ百文錢ニハナヲ又故ニフノ不足ノ五十文
ヲタス意ニ療治スベキト是當然ノ理ナリ今血崩血脱

證モ此理ニカワルコトナレ一升ノ血カ五合不足ナ
ラハ五合ノ血ヲ生シテ五合ノ血ヘ足セハコレ本ノ一
升ノ血トナルナリ其五合ノ血ヲ生スルニハ必天地ノ
物ヲ生スル処ノ陽氣ノカラヲ生セ子ハナラヌナリ是
則藥一在テハ四君子湯ナリ又四物湯ヲ用テソノ不足
ノ血ヲ生セントイフハタトヘハ冬枯ノ木ノ枝ニ冬花
ヲサカセタシト子ガフガ如シケツレテ生スヘキノ理
ナク反テ陰ニ陰ヲ重テ大變ノ本トナルナリ故ニ四物
湯ハ血崩血脱ノ大禁物トハスルナリ問テ曰然ニ血崩
血脱ノ證ニ四君子湯ノゴトキ陽藥反テ相應セヌヤハ
リ陰藥ノ四物湯ニテヨロレキ證モ亦ハナハタ多シホ
スレハ呉山甫如四物湯禁戒ノ語モアテモナレヌ処ア

リ此理イカン答テ曰ソレハ大事ノ口訣ヲシラヌ故ニ
右ノウクガイモ發スルコトナリ若口訣ヲ以ニ其證ヲ
見トランニヲイテハ千ニ千ニ万ニ万四君四物ノ方處ノ
カ子アイ違フヘカラス問テ曰子ガアクハソノ大事ノ
口訣ヲキカン答テ曰スヘテ血崩血脱ノ證是四物湯ア
ヨイ是ハ四君子湯テヨイトイフ目的ハ唇ノ色濃ト薄
トノ様子ヲ見テトルニアルノミ是脉ヨリモナヲ肝要
ノ見ドコロナリト知ルベシ唇ノ色ヲ見ルニ平日無病
ノ人ノ唇ノ色ヨリ少し血ノ色淡テシユルモノハコレ
四君子湯正面ノ治法ニテヨロレキ證ナリ扱又夫ヨリ
モ餘程淡テシユルハ四君子湯正面ノ治法ニテヨロレ
キ證ナリ扱又ソレヨリモ餘程淡テシユルハ四君子湯

續命湯
續命湯

續命湯

ハカリニテモワノカ足ラズ少シ桂枝カ乾姜等ノ熱藥
ヲ加ヘテヨロシキ證ナリ扱又ソレヨリモ一等ヲコヘ
テ淡少シ手足ニ冷ナトモアルナラハ四君子湯ニ附子
ヲ加ヘハナハダシキニハ桂枝ヲソノ上ヘ加ヘテヨロ
シキ證ナリ扱又ソレヨリモ唇ノ色淡ツヨク手足モ冷
テ厥冷スルダンニナフテハ春ノ陽氣ノゴトシ故ニ四
君子湯モ手ノルクシテ間ニアハスコノ段ニナツテハ
先ツ四君子湯ヲハヤメニシテ夏ノ陽氣ノゴトキ四逆
湯ノ大熱劑ハカリ用テ急ニ厥冷ヲ引カヘシフノ後四
君子湯ヲ用ユベシ扱又唇ノ色サツハリト血色ナク青
白手足モ厥冷ノダンヲコヘテ氷ノコトク底カラ冷夕
ンニナツテハ療治処ニテハナク必ス死人證ナリ附子

モ參芪モ入ルベカラス是唇ノ色ヲ見テ四君子ヘ段ヲ
ツケテ輕重ヲ定ムル処ノ口訣カリ右云フ処ノ證ハ陽
劑ノヨロシキ処ノ證ニシテ四物湯ノゴトキ陰藥ハ必
ス用ユヘカラサル処ノ證ナリ若誤テ用ユル時ハ水ノ
上ニ雪ノフルゴトク陰ノ上ニ陰ヲカサ子イヨク血崩
血脱シテ死ス吳山甫如禁戒ノトヲ禁戒スルナリ前ノ
上下失血ハナハ甚者禁勿与而四物湯ヲトイフ意ヲヨ
ク考フベシ○又血崩血脱ノ證若シ唇ノ色平日ノ如
クトシモカハルナク血ノ色淡ザルハツノ血分有餘
スルカ扱ハ瘀血ノワサナルカ又血熱ノ故カナリ是テ
レハ血多ク出ル凡四物湯タルシカラシ只四物湯ノ如
キ陰藥ノクルシカラザルハカリニアラズ其上ニ黃連

原田氏家傳
續編附錄

二四一

黄芩ノ寒藥ヲ加味シテ其血分ノ邪熱ヲ去ル時ハ血自
然ニ治然トシテ血崩血暈ハ治セスレテ止ルコトアリ是
モ唇ノ色ヲ第一ノ見處トシテ次ハ脉ノ虛實其次血ノ
色ニ心ヲツケ彼是諸證ヲトクト引合セ考ル時ハ處劑
ノ誤リ有ヘカラス是上下失血ノ證ニ四物湯ヲ用ユル
口訣ノアラマシナリモシ右ノ如キ證ニ反テ思ヒスゴ
シヲレテ四君子湯ヲ首トシテ其外熱劑ヲ用テ反テ有
餘ノ血邪ヲ包テ病苦ヲマストモ又多クアルコトナリ岡
本玄治先生ノ方ニ黄連解毒湯ニ四物湯ヲ合シ棕ノ灰
ノ加ヘテ失血ノ證ヲ治スル方アリ是ソノ一證ナリ予
ガ治例モ又多シ

真寒假熱治驗

攝陽 奥田子服憲民述

浪華北濱一商賈ノ妻年三十有餘ニシテ傷寒ヲ患フ初
ノ惡寒發熱シテ身體疼痛シ製痛シテヌケルガ如ク汗
イテ、衣ヲヒタシ意自利セントス其脉沉瀄ナリ即チ
桂枝加木附湯三貼ヲアタヘテ去ル明朝ニ至ツテ自利
スルコト過多ニシテ厠ニノホルコトアタワス便器ニヨリ
大イニ疲カレテ悶絶セントス主人ヲビロキテ他ニ醫
ヲ求ム尾崎某者來リテ診テ曰クコレ傷寒ニ非ス宿食
毒ナリト主人ツマヒラカニ予カ前日大陰ノ中風トシ
桂枝加木附湯ヲ與フルコトヲ告ク医省リミスレテ大承
氣湯三貼ヲアトウト予知ラズレテ往テ見レハ主人怒
ツテ誤治ヲ責メ且ツ早朝ノ容躰ヲ云フ予カ云クコレ

大陰ノ症悉クソナワル者ナリ吾弱手愚昧トイエトモ
何ソ如此クニ齟齬スルノ甚タレキコシ大ヲ見テ以テ
猿トスルニ異ナラシ後日ヲ待テ誤リヲタ、サント云
フテ退家母カツテ病者ト相識ナリコレニミヅテ後ニ
日往イテ診スルニ六脉浮數ニシメ大ナリ身體大熱シ
テ火ノ如ク譫語煩燥シ渴シテ水ヲ飲ントホツス舌上
黒胎アリテホトシト陽明實熱ノ症ニ似タリ予侍女ニ
コウテ處劑ヲ見レハ白虎湯ナリ而医サキニ病イ食毒
ナリト云テ今マタ白虎湯ヲアトウルト何ソヤ然レトモ
可否ヲイワスレテ帰ルノ翼日主人來リテ診ヲ請フ
既ニ往イテ見レバ危篤ナルト前日ニ倍イテ辭レテ去
ラントス主人懊悔シテ一七藥ヲコフ予カ云フ病人本

胃中寒冷ニシテ表裏トモニ虚スルノ症ナリ而ルニ醫
及ツテ大イニ寒冷ノ藥ヲ以テ泄下スルニヨリコノ如
ク難症ニ變スル者ナリコレヲ大逆トス今ステニ救イ
難ケレハ順治ヲモツテ死地ニツカシメンカ乃附子理
中湯大劑三貼ヲアトフ其夜往イテ診スレハ六脉遲緩
ニシテ煩渴ヤシ譫語ヤ、レツカナリ亦前方三貼ヲ作
ツテ與フ其ノ翼日予他ニ行テ歸ル家母ノ云フ病家ノ
使再三來リ急變ヲ告クト予謂ク前膏少ク快機アリ何
ソ然ルヘケシ家人ノ云ク人命常子ナレ死生ノ辨良医
モ明ラメガタレ况シヤ子ニ於テヲヤ予行テコレヲ見
レハ四體熱去ツテ皮膚水ノ如ク戰汗衣ニナカレテ氣
息ヤ、カスカニシメ眼コトシ脈微少ニシテ尸ノ如シ

予カ云ク此レ陰陽歸干原榮衛和通シテ餘邪汗ヨリレテ去ルナリ暫クシテ汗セ止ムベレ即チ前方ニ如黄耆三分六貼ヲアトフ翼日病家禮謝メ云フ今朝カユニ挽吸ルト往テ視レハ四體温々トメ昧和シテ沉緩ナリ其後氣血ヲ調ヘ脾胃ヲ補ヒ前後療スルヲ二十五六日ニシテ全愈ス

此ノ病人モト脾胃虚寒血氣ヨワク陰陽俱ニ虚スル處口ヘ傷寒ノキニシキ邪ニ中リ故ニ大陽少陽ノ症ヲ見ワサスレメ陰症ヲ見ワス者ナリ然ルニ医大イニ泄下シ表邪不除シテ熱反テ盛シナリ熱サカンナルヲ見テイヨク下シ裏氣傷ヲウクルニヨリ陰陽原トト歸シ位ニ安ニスルヲアタワス變シテ陽明實熱ニ似タルノ症

ヲ頭ワス者ナリノ場デハ真寒假熱ノ目的ハ脉浮數而大ナレ凡指頭一テ按セバ皮肉ノ間ニ散乱シテナシカロク按セハ浮數一レテ大ナリ是スナワチ真寒假熱ノ脉狀ナリ腹中上下濡弱ナルコレ乃虚腹ナリユヘニ附子理中湯カ相應シタルモノナリトカクニ医術ハ脉腹ノ診察ツニアリヨク々々参伍スヘシ

真頭痛治驗

一男子年四十餘一日卒然トシテ頭百會ノ宛ヨリ起ツテ頭上一チノシ疼痛スルヲ裂クカ如クカナ掬チニテウツガ如シ熱スルヲ炎ノ如シ嘔逆シテ黄水ヲ吐シ目アヘテ開クヲ得ス足臍厥冷スルヲ氷ノ如シ甚タシキトキハ氣絶ツレテシバラク人事ヲ知ラス日二三四

度モ発ス苦楚忍フヘカラスト云フ是ヲ診スルニ脉細
數ニシテ身熱ナク舌ニ胎モヲヒスタ、腹内臍中ノ動
氣衣ヲウツニ便ツ子ノ如シ乃傷寒ノ吳茱萸湯ニ沉香
五分ヲ加ユテアトフ二日ノ中氣絶ツ止ニ嘔逆吐水ユ
ルテリ足臏ノ厥スルモ少シ温レリ頭上ノモユルヤウ
ナモ大半ケンシ然レモ臍中ノ動氣サカンナリヨ
ツテ桂枝加龍骨牡蠣湯ヲ服サシム十日ノ後動氣ヤ、
ヲサマリテ前症コトク愈タリ

水逆病治驗

堂嶋一商買年三十有五ニシテ吐水ヲ患フ寒熱往來虐
ノ如ク脉促ニシメ舌上少シ黄胎ヲヲヒ煩渴シテ水ヲ
ノムヲ數升飲メハ吐キイタシハイテハノム小水利セ

ス大便溏瀉スルヲ三十五日食絶スル七日ハカリ肌肉
ヤセテ皮膚ザラクトレメレブ紙ヲナデルカ知シ初メ
一医虐トシテ柴胡桂枝加瓜蒌湯ヲアトフ應ゼズレテ
他醫ヲ請フ水逆ノ症トシテ五苓散ヲ與フ六七日ヲ經
テモ止テス又舅家ヨリ一大医ヲ、カユ醫診シテ云脾
胃虚勞役ナリト乃六君子湯ヲアトフ三口ノ後呃逆ヲ
発シテ連綿タリ予ニ請フテ診セシム、頸症前ノ如シ而
脉促ニシテ微滑ヲ帶ヒ腹中不容ノ宛アタリ胃部ヨリ
小腹、テ鞭満シテヲセバイタム予ヲモエラク前医ノ
意ヲナ故アルカ然レドモ快口ヨカラサルハ其機ニ的
クラサルナリ病家レヒテ藥ヲ請フ予調胃承氣湯ヲア
トフ初メ二三貼ハ吐シテ不入ヲシテ服セシメ又硝黄

ヲ末トシテ一大ヒヲ兼用ス二日ノ後漸クフサマリ大
便ニ具惡ノフン汁ヲ瀉下スツ、イテ燥屎ヲ下ス丁十
五六枚小水ニ合半ハカリ通セリ吐水初メテヲサマリ
寒熱往來大半退フキ脈及テ滑數ヲアラハシ依テシキ
リニ承氣湯ヲ服セシム一日大汗出テ、衣ヲウルヲス
レカレ凡汗ニカマワス前方ヲ服サシメ後柴胡養榮湯
ヲアタエヘ調フ丁十七日ニシテ全ク愈タリ
此等ノ症ハ初メヨリ誤治スルニモアラ子ドモ傷寒論
ノ水入ル則ハ吐スル者ヲ為水逆トスルニカ、ワツテ
診脈腹侯ヲツマヒラカニセザル故カ又柴胡加桂枝瓜
蒡湯ヲ附クモ寒熱ノ往來ニヨツテト思ワル又一夫医
ノ脾胃虛寒トシテ六君子湯ヲアテラレシハ身體ノ虛

分ト脈ノ促ナルヲ見テ診察功者タテ、及テ其機ヲハ
ツセリト思モフヨク、脈腹ヲテラシ合セテ子ハ虛
實寒熱ノ處カ辨別シカタシ

傷寒三部之候

病人ノ腹中ヲ候ウニマスニ指ヲ以テ右ノ胸下胃部ヲ
按レテウ、シト氣息スルモノハ表症ニ屬ススナワチ
桂枝葛根湯麻黃湯ノルイ撰ミ用ヒテ發汗スベシ又右
ノ如クニ中腕ヲ探レテウ、シト氣息スルモノハ大小
柴胡湯或ハ五瀉心ノルイ考ヘアトフヘシソレヨリ一
ダン下リテ左ノ臍ノワキヲ按レテ同シクキハスムモ
ノハ大黃芒硝デナクハ解セメナリコレハ三陽ノ目的
ナリ三陽トモニワレクノ症アラワルトイエ凡又中ニ

モ下スヲアヤマリ反テ表症ヲ顯スヲアリ發汗タラ
スレテ裏症ヲアラワスヲアリコレ其ノトキノ目アテ
ナリ此ノ理ハ具有可カ温疫論ニ通塞ノ事ヲ云レタリ
且又傷寒ノミウカコウニ非ス諸毒スヘテミナ左ノ臍
膀ニヨルト深師ノ秘事ナリ
或ハ痢毒微毒痔毒淋毒膿毒便毒下疳瘡毒或婦人血塊
小兒虫積癖毒疝瘕ノルイミナヒタリノ臍ノワキ上下
ニヨルヨクサグリ知ルヘシ深師ノ圖解ニツマヒラ
カナレトモ此ニ略ス又食毒ハ大人小兒トモニ右ノ胸
下脾胃ノ部ニコリアリ痘毒胎毒ハ諸毒ト部位ヲコト
ニス胎毒ハ嬰兒ノトキハ右ノ胃部ニアリテ年月ヲ經
ルニシタカヒゼシク下ヘクタリ右ノ臍膀ニヨル三四

歳五六サイイツトテモ發痘ノ時ハモトノ脾胃ノ間ニ
ノホリ居テ痘瘡ノ邪氣熱ソニテ表裏諸經ニ散亂ス故
ニ脾胃ノ部トホソノキワトヲヨク探リ毒ノ多少ヲ
見定メ痘ノ難易ヲ知ルヘシ婦人血塊左ノホソニヨル
トイヘトモ又ホソノ下ニモヨル又古キ瘀血ツハ右ノ
横骨ニ付テアリ帶下病ノルイナリ
此ノ目的口快ツハ予カ臆見ニアラズ深師ノ口傳ナリ
數年試ミルニ顯然タル腹侯ナリ予秘ニセスレテ同志
ニツク

内經精明五色之辨

素門脉要精微論ニ曰精明五色者氣之華ナリト
五臟生成篇一曰色見青如草茲者死ス黃如枳實者死ス

黒如^ク始^シ者死ス赤^セ如^ク血^{ケツ}者死ス白^{クハク}如^ク枯骨^{コボネ}者死ス此五色
之見^ミ死^シ也青^{コトナ}如^ク翠羽^{スヰウ}者生^ナ赤^{コトナ}如^ク雞冠^{ニキカ}者生^ナ黃^{ワウ}如^ク蟹腹^{サガハ}者生^ナ
白^{コトナ}如^ク豕膏^{シカウ}者生^ナ黒^ク如^ク鳥羽^{トウウ}者生^ナ此五色ノ見^ミ生^ナ也ト云^ク
夫レ五色ノ辨別外物ニタトヘ云テアレドモンカト
見ワカル、考ニ非スソノ精微ノイロヲ見ンカタメ
ニモウケレモノアリ而其カスカニ見ワル、乃至ツ
テミカタレ故ニ予カ深師ノ云ク五色精微ノ善惡ヲ
見ント思ワハ先ツ明暗ノ二色ヲ觀察スベシトツノ
明暗ノ二色ハ兵家ニ氣ヲ見ル秘事ナリ暗色トハ日
暮ノ人面ノミソカレメトキノ色ナリ其時ノ空ノイ
ロ世間ノケレキヲ見ルヘシナニトノウズ、黒ラク
シテ底サムシク物カナレキ氣色アリ此乃チ暗色ト

云フモノナリ則大陽地中ニ入ツテ極陰ニ行クノ初
メスナワチ大凶ニシテコノ氣色カ面部ニ見ワル、
時ハ輕キ病人ハ重クナリ重キ病ハ死ス 又明色ト
ハアカクアキラカナヲ云ニ非ス夜曙ケ前ノ空ヲノ
イロ雲ニテモ何ニテモ同シク、ロケレトモナニト
ノウニツトリト底テリアツテ温順ノ氣色アリコレ
大陽地上ニ出ルノテヘナリ是スナワチ大吉ニシテ
コノキシヨク面部ニアラワル、則チ大病ハカルク
ナルナリ サテ日暮レカタ夜アケ方何レモクラケ
ンドモ朝氣暮色ハ陰陽ノ離合進退ノ處ロシゼント
ケレキ大イニ異ナリコノ道理アシバイヲヨクク觀
察シテ今日病人ノ面部ノウタイノ氣色ヲ見悟トル

察台ノ炎 賣舖付録

ベレト云へリコレ五色精微ヲ見ルノヒト夕テナリ
夫レ精明トハ眼目ノ一ナリ此ヲ精明ト貴トフモノ
ハ萬物ヲ視テ黑白ヲ別チ長短ヲツマヒラカニスル
者ナリ

大惑論ニ曰五臟六腑ノ精氣皆上注於目而爲之精云云
故陰陽合傳レテ精明ナリ且又ソノ眼目中ノ一大事
ノモノハ瞳子ナリ瞳子ヲ以テ和訓ヒトミトヨム
實ニ中レルカ愚按スルニヒハ火ナリトハ止、マ
ミハ水ナリスナワチ臟腑ノ水火陰陽ノ精氣眼目瞳
子ノ中ニ止ルモノナリ因テヒトミト訓スルモノナ
リ東垣先生ノ云ク瞳子不轉者ハ死スト云へリ
八難ニ曰寸口脉平而死者何謂也然リ諸十二經脉者皆

係於生氣之原所謂生氣之原者謂十二經之根本也謂腎
間動氣也五臟六腑之本十二經脉之根呼吸ノ門三焦之
原一名守邪之神故氣者人之根本也根絶則莖葉枯矣寸
口脉平ニ而死者生氣獨絶於内也云云
脉經曰腎間動氣尤爲腎右爲命門命門者精神之所舍原
氣所係人所得於天以生之氣

啓玄子カ云命門者屬火乃五臟六腑之真陽ナリ腎者
屬水乃五臟六腑ノ真陰ナリ乃火ノ性命ナリ故ニコ
ノモノ在テヨク生長スル而予今又人トミヲモツテ
腎間生氣ノ外榮トシ死生吉凶ヲケツスソレ病人死
ニ近キモノハ此瞳子マ死ヲ見ワスモノナリ死ト
ハ人トミノ光輝ノ明暗ント氣カノアルナキトヲ視

テ云フナリ病人久シク見張コトデキス腫子中ズ
クロクボツトシテツヤナクチリクトシマリナク轉
運スルコトヲクシテ瞭然シタラサル者腫子ノ死ヲ
見フスナリコレ腎間ノ憊イ性命イ脱亡シテ天ニ帰
スルナリコレ天ニ得タルモノユヘナリコレソウイ
ナキコトナリ 孟子曰人ニ存スルモノ腫子ヨリタ
、レキハナレト腫子ノ惡ヲ掩コトアタワズト云
ヘリヨクク觀察スベレ 積山先生モ大病長病ノ人
眼コノ光リ急ニ甚タレキハ死スト云ヘリスベア此
ノアンバイハ眼ノヒカリノミニカキラズ脈腹ニモ
アルナリ傷寒論ニ少陰病下利脈無ク白通湯ヲアタ
ヘ脈暴リニ出ルモノ死ス微レク續モノ生クト要略

ニ水病脈ニワカニ出スル者ハ死スト云フ此レヲタト
ヘテ云ワハ燭ヒキエント欲レテ炎烈スルガ如レ微續
クモノハ陽氣漸ク復スルノ兆ナリ

療治茶談續編附録終

續編附錄

古曰千金之裘非一狢之腋
善謂鴻術之業非一世之能
備一人能了而世殊人異施
設之變矣是以君子雖本古
修道言必時服必鄉惟天之
生才也似使各才其時詳其
一端而尚且待于將來者也

古曰千金之裘非一狢之腋
善謂鴻術之業非一世之能
備一人能了而世殊人異施
設之變矣是以君子雖本古
修道言必時服必鄉惟天之
生才也似使各才其時詳其
一端而尚且待于將來者也

續編附錄

三

醫之為道亦然二徑一難長
沙之偏人孰不知為法方之
祖讀之而季世人澆俗薄稟
質亦矣非居其時見其病所
原考古按今施治術者則不
以盡其詳也南總積山氏著
療治茶談乃其書也備中三

宅道甫受學于積山氏乃綴
其緒編為茶談續編可謂善
繼志者也浪蕪與田憲民梓
以公于世亦可謂善知時者
也頃日其附錄刻成乃遠介
人以徵予一言予非知憲民
者而喜二氏之業知時救人

之意切書此贈之云

寬政庚申季秋

南紀 梅嶺宮川子換



